

団塊の世代との協働を考える

吉野の再生の扉

吉野の地域振興について、様々な場面で語られることが多くなっています。しかし、過疎化や少子高齢化、地域産業の不振による就労の場の激減など山積している課題を指摘し、吉野には何も無い、人はいないということをなげくばかりであることに憂いを感じています。

今、吉野を考えるうえで本当に必要なことは、吉野のすぐれた側面を把握し、いかにそれを生かし、伸ばすのか、また弱点や欠点を正確に把握し、それを克服するために何をすべきかを考えることです。

私たちの生活や文化を少しでも良くしよう、吉野を一步でも発展させよう、みんなで力を出し合って協力していこうという人々が集まり出会うことにより夢が生まれ、その夢をみんなで育んでいくことで、吉野の再生への扉が開かれるのです。

吉野の魅力とは…

それでは、吉野の優れている点、魅力は何なのでしょう。一つには、まちの中央を吉野川が流れみどり豊かな自然、古くから多くの歌人の心を奪った風光明媚であり、またその中に数多く残されている歴史文化遺産でしょう。

加えて、吉野は、杉・檜の生産に適した温暖多雨な気候条件を有し、古くより林業及び製材業を基幹産業として、吉野材と呼ばれる優れた品質の木材を供給してきています。

また、吉野の地場産業である和紙や割り箸の製造は、優れた技術に裏打ちされた伝統工芸です。

活力が消える吉野

しかし、現状の吉野は、若者の流失による労働力の不足等により手入れがなされず放置され

た山林あるいは耕作されない遊休農地が増加し、後継者不足等により廃業に追い込まれる割り箸などの家内工業も少なくなっている、それにともない各地区に空き家が急激に増加し、地域の灯りや活力が消えつつあります。

団塊の世代との協働

さて、吉野を再生するための施策としては企業誘致、観光開発等いろいろな施策を複合的に進めていかなければなりません。ここでは地域の基礎的な力の維持存続のための施策の一つを提案します。

これからの日本、とりわけ都市においては、団塊の世代の人々が大量に定年を迎えることになり、都会の雑踏の中で汗を流し一つの仕事を成し遂げた企業戦士たちの多くは、第二の人生を静かな田舎に求めようとしています。そうした事態を私たちはどのようにイメージできるのでしょうか。

それは希望を失った高齢者が堆積する「沈み込んだ吉野」な

のか、それとも経験豊かな高齢者が地域に戻り、新たな可能性を模索する「希望に満ちた吉野」なのか。私たちはそれを拒絶していいのか、それとも積極的に受け入れ態勢を整え新しい生活を提案していくのか。

豊かな高齢者社会を築き上げていくには、地域に戻った高齢者の生き甲斐を受け止めるための「就業の場」「起業の場」の提供が重要性を帯びてきます。特にこれからの高齢者は健康に優れ、気力も充実しています。そして、自分の職業生活で獲得した「経験を次の世代に継承したい」「あるいは「社会に還元したい」と願っているのです。吉野はこうした「思い」を正面から受け止めていかななくてはなりません。

こうした人々との協働によって放置された山林や遊休農地の整備や地場産業の振興、空き家の解消を図りながら今後の吉野の振興を創造していくことも地域の再生を図るうえでの重要な施策の一つとなると考えます。

をするための米や野菜を耕作しているだけではないでしょうか。

しかし、自家消費の野菜を作っているだけでは農地がどうしても余ってしまいます。そこで、余った農地にたくさん野菜を作っていたら直売所で販売してはどうでしょうか。

最近では、道路事情がよくなってきており我が吉野町の北の玄関口である西谷地区などは、新鹿路トンネルの開通や京奈和自動車道の整備により都市部からのアクセスがよくなり交通量が増えています。大淀町でもiセンター（道の駅）が建設され週末にはたくさんの方々が賑わっています。吉野町も大槌田公園のようなまとまった土地で道の駅のようなものを建設し、そこで地元でとれた野菜を販売すればどうでしょうか。健康意識が高い現在、作物を作った人がわかる農作物は都市部の人々に安心感を与え魅力的なものに違いありません。

農地の有効利用を考える

地域が一体となって

農地の保全を…

『遊休農地』とは何も耕作されていない田畑のことですが、今吉野町だけでなく全国的に問題になっていきます。

昔の米作りは、手作業によるものがほとんどで田植えや稲刈りといえば、近所の人たちが協力し合っていました。

しかし、機械化が進み、だれもがトラクターや田植え機を使用するようになり以前のように助け合って農作業を行うことがなくなりました。

しかし、機械には維持費がかかります。吉野町の農家は兼業農家がほとんどで、農業以外の収入で農機具の維持費を賄っていました。食生活が変化したことにより、米の消費が減り、国の政策による減反や米価格の低下で、農機具の維持費や労力を考えると作るより買ったほう

がいいということになり、一層、農業離れが進みました。

そういったことにより、現在では、農業者の高齢化が進み後継者がいないという現状により、大半の農家では、いままでのように農業が続けられなくなり、結果的に遊休農地が年々増加しています。

遊休農地の増加を止めるには、個々で米作りをするのではなく隣接している田んぼを耕作している人たちが手を組んでみんなで協力し農機具も共有すれば

ば労働力や維持費の負担の軽減になるのではないのでしょうか。これからは、自分の農地を自分で守るというだけでなく地域が一体となって農地を、保全するということを考えていかなければなりません。

需要のある作物の耕作

また、ただ単に何かを作ればいいというのではなく、需要のある作物を耕作する必要があるます。

たとえば、私たちの周りには、花粉症という悩みを持っている方がたくさんいます。

そこで、花粉症に効くといわれる食べ物といえば、じゃばら、べにふうき（お茶）、緑茶、しそ、ハーブ、レンコン、トマトなどがあります。そういったものを遊休農地に作るというのはどうでしょうか。

道の駅による直売所

吉野町の農地の利用はどうでしょうか？ほとんどが自家消費

